2016 年度ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金（B）
ジェンダーフォーラム『年報』掲載論文

日本文学の中のレズビアン
――日本近現代文学における女性同性愛表象研究の方法論試案

加藤　明日菜（立教大学文学研究科日本文学専攻博士前期課程）

はじめに

近年、日本社会において、性的マイノリティへの注目が高まってきている。依然として同性愛蔑視の風潮もやはり強いが、「ＬＧＢＴ」という語に集約された性的マイノリティの在りようは、「多様性」の１つとして称揚され、同性カップルに対し、結婚に相当する関係を認める証明書の発行を行うことを定めた渋谷区の条例はその大きな具体例の１つであろう。称揚や、その具体例である渋谷区の条例に問題が無いわけではないが、不可視の状態であった性的マイノリティの存在が社会的に認知されつつある、ということ自体は１つの前進と言える。

本論は、未だ十分にはなされているとは言い難い、日本近現代文学における女性同性愛の表象研究に対し、方法論を提案するものである。女性同性愛をめぐる研究は、欧米のレズビアン／ゲイ・スタディーズやクィア・スタディーズの蓄積があり、また日本においても女性同性愛に関する明治末から現代にいたるまでの言説研究や当事者研究がなされてきた。しかし、日本近現代文学という視座において、女性同性愛という問題系は成熟していないと言え、また以上の蓄積に対し、充分な取り込み、あるいは接続は果たされていないように思われる。ゆえに、本論では他分野の蓄積を尊重し、またそれを活かす形での方法論の提案を試み、日本近現代文学における女性同性愛表象の研究の１つの手掛かりとなることを目標としている。

1. 日本近現代文学における女性同性愛の表象の研究へ向けて

日本近現代文学における女性同性愛表象の研究の意義は、不可視化されている女性同性愛を日本文学の世界において／から可視化させることである。「ＬＧＢＴ」という語によって、同性愛自体が以前に比べ、社会的に認知されつつあることは確かであるが、女性同性愛への差別や不可視化は、日本の現状に触れた近年の研究において繰り返し指摘されている。セクシュアルマイノリティやジェンダーマイノリティを研究テーマとしている社会学者の杉浦郁子は、現代日本社会は父権制保持のため、男性同性愛嫌悪を伴う異性愛主義が浸透させられた社会であり、「女同士の絆」は「未分化で曖昧なものとして構築されている」ゆえに「男性を望まない欲望」「男性に望まれたくない欲望」の表出は困難なため、レズビアンが不可視化ないしは差別されているとしている（杉浦、2010：66-73）。杉浦の問題意識

を引き継いだ三橋順子は、レズビアンが現代日本で目に見えないのは「隠されているからにほかならない」とし、未だレズビアンに対する認知、情報流通が不十分であって「レズビアンを取り巻くさまざまな困難な状況について地に足が着いた議論がなされる状況には、残念ながら至っていない」と指摘する(三橋、2016：136、148)。レズビアン・スタディーズ、クィア神学を専門とする社会学者であり牧師でもある堀江有里もまた、カミングアウトという行為が抵抗となり得る一方で、「不承認」と「歪められた承認」、すなわち存在そのものの無化、あるいは性的なイメージとして消費されるポルノ化という社会の眼差しによって、レズビアンであるという表明にもかかわらず、レズビアンは「消される」のだと述べる(堀江、2015：132-133)。現代日本において、レズビアンは未だに不可視であるか、ステレオタイプ化という不当な形で可視化されているのであり、十分な認知と理解に至っているとは言い難いのである。

レズビアンの不可視化は、女性を愛する女性にとって大きな不利益となる。杉浦は自らの性的指向に沿った人生設計の困難や、同じ性的指向を持つ他者の存在を知ることができず「仲間」に出会うまでの長期にわたる待機などを挙げている(杉浦、2010：60)。三橋もまたマスメディアの隠蔽が「魅力的なレズビアン・ロールモデル」の出現を阻み、その不在が「レズビアンの自己肯定をいっそう困難にしている」とし、レズビアンの自己承認が不利であることを指摘する(三橋、2016：149)。女性から女性への欲望の不可視化はパートナー選びなど人生の大きな選択を誤らせる、あるいは困難にすると同時に、当事者自身からレズビアンとして自尊心を持つ契機を奪っているのだ。日本近現代文学という領域において、十分な可視化がなされていないということは、日本のレズビアンにとり、自国の文学から排除されているという、まさに文化的不当にほかならない。現在、日本のレズビアンは、日本の文学に果たしてアイデンティファイできるであろうか。

日本近現代文学において、女性同性愛の表象それ自体や、それに纏わる研究の蓄積が全くないわけではない。作品は決して多いとは言えないが、恐ろしく少ないわけでもなく、また個別作品単位での研究も蓄積の差はあるが、行われている。しかし、先行研究が希薄なものや、課題が残されている作品も多くあり、女性同性愛の表象という観点を重視しながら、これから研究を深めていく必要があると言える。

だが、そこからさらに目指したいのは女性同性愛の表象を体系的に整理していくことである。そうした研究としては、1910 年代の小説に描かれた女性同性愛に着目した吉川豊子の研究(1998)、また明治末から大正にかけて、文学を視座とし、女性同性愛の主なトピックを俯瞰している菅聡子の研究(2006)などが挙げられる。とは言え、吉川や菅の研究は非常に示唆に富むものであるが対象とする時期が短く、明治末から現代までを視野に入れた女性同性愛文学の系譜ないし変遷を辿るため、残されている課題は大きい。

日本近現代文学における女性同性愛作品の変遷を辿るには 2 つの困難がある。1 つはレズビアンを好奇的に眼差すような作品が日本文学の重鎮と見做されている男性作家によっていくつも執筆されていることである。例えば、谷崎潤一郎「卍」(1928～1930)、堀辰雄「水

族館」(1930)、三島由紀夫「春子」(1947)、川端康成「美しさと哀しみと」(1961～1963)、吉行淳之介「暗室」(1969)などである。それぞれの作品において、程度の差はあれ、女性同性愛はスキャンダラスなものとして表象されており、女性同性愛文学の変遷を辿る上で扱いが難しい作品群であろう。

もう 1 つの困難は、何を女性同性愛と見做すかということである。そもそも女性同性愛、ないしはレズビアンの定義をめぐって様々な議論が重ねられてきたが、女性同性愛文学の変遷を辿る中でひとつ指針を定めなければならないであろう。

以上のように、日本近現代文学という領域において、女性同性愛という問題系は発展途上である。系譜の希薄性はレズビアンの不可視化にほかならず、研究を体系的に行うことは二重の抵抗となりうる。まず、日本近現代文学の俎上において、1 つのジャンルとして確立させるという文学的可視化である。第二に、文学の世界からレズビアンの存在を立ち上げることで、レズビアンそれ自体の至当な可視化を促し、かつレズビアンに対し、アイデンティファイしうる対象すなわちロール・モデルを提供するという、レズビアン・セクシュアリティ[1]の充分な認知と自己肯定の促進化である。レズビアン・セクシュアリティを有する、あるいは非好奇的に関心を寄せる人が、日本文学を享受する、ということが現代において明白に実現していない以上、試みてみる価値はあるであろうし、また試みなければならない抵抗であり、課題であろう。

2. 女性同性愛表象の体系的研究において出発点とすべき地点とその範囲

日本近現代文学における女性同性愛の表象を体系的に扱う場合、起点とすべきは明治末から大正期にかけてであろう。明治 44 年にあたる 1911 年の 7 月末、新潟県親不知の海岸で女学校の卒業生同士による心中事件が起きた。肥留間由紀子は、同事件は『読売新聞』では「恐るべき同性の愛」(1911 年 7 月 31 日)、『東京朝日新聞』では「極端なる同性の愛」(1911 年 7 月 31 日)として報じられたことを取り上げ、同事件以後、ジャーナリズムにおいて女学生間の親密性が言及されるようになったとして、同事件を近代日本における女性同性愛の「発見」として位置付けている(肥留間、2003：14-15)。

また 1911 年には、性的関係を含んだ女性同性愛を描いた田村俊子「あきらめ」が『大阪朝日新聞』に懸賞小説入選作として連載され、日本フェミニズムの嚆矢と言われる『青鞜』も創刊された。『青鞜』主催者である平塚らいてうと尾竹紅吉の同性愛関係は近代日本における女性同性愛を考察する上で大きなトピックとなっている[2]。また、『青鞜』には紅吉との関係が破局した後にホモフォビアを強めたらいてうによってハヴロック・エリス「女性間の同性恋愛」(『青鞜』第 4 巻第 4 号、1914)が掲載され、他方青鞜社退社後の尾竹紅吉は雑誌『番紅花(さふらん)』(1914.3～8)を創刊し、同誌には同性愛の社会的価値を論じたエドワード・カーペンター「中性論」が翻訳掲載された(赤枝、2011)。

田村俊子は「あきらめ」以外にも「悪寒」(1912)、「春の晩」(1914)、「若いこゝろ」(1916)など女性同性愛をテーマとした作品を書いている。1916 年には吉屋信子が若い女性間の絆

を描いた『花物語』(1916～1924)でデビューし、女学生の間で非常な人気となった。

また、日本において西洋の性科学の受容が進むのもこの時期である。古川誠によれば、1920 年代の日本では性欲学が流行するのであるが、それを準備した 1 つの回路として 1910 年代の西洋の性科学の翻訳書ブームがあったという(古川、1993：115)。明治半ばに抄訳され、1913 年に漸く完訳されたクラフト＝エビングの『変態性欲心理』では同性愛に多くのページが割かれており、彼の同性愛解釈は、日本の性欲学の中心人物であった羽太鋭治、澤田順次郎の共著『変態性欲論』(1915)などに引き継がれることとなる。

このように、女性同性愛をめぐる初期のトピックが概ね出揃うのが明治末から大正期にかけてなのである。日本近現代文学における女性同性愛の表象を体系的に検討するにあたり、女性間の愛が「発見」され、様々な媒体によって語られつつあったこの時期を、ひとまず研究の出発点として据えて良いであろう。

また、女性同士のどのような親密性を〈女性同性愛〉と名づけ、かつ研究の対象としていくべきなのだろうか。一般に、友情／恋愛の境界線として重視される傾向にあるのは性的欲望／接触の有無であるが、日本近現代文学を女性同性愛の視点から辿り直す時、性的なものを条件とすると見落としてしまうものがあまりにも大きいように思われる。例えば、自身も門馬千代という女性をパートナーに持ち、『花物語』や「屋根裏の二処女」(1920)など女性同士の強い結びつきを描いた作家として吉屋信子が挙げられるが、菅は「女性同性愛を(表面的には)脱性化した〈ロマンティックな友情〉として表象することで、広範な読者層に受容されるという戦略をとっていた」(菅、2006：30)と指摘する。また、女性同士の絆の表象を検討する上で決して外すことのできない、女学生同士の親密性にも性的なものの影は薄い。そこで参照したいのがアドリエンヌ・リッチによる「レズビアン連続体」の概念である。

> […]レズビアン連続体という用語には、女への自己同定の経験の大きなひろがり――一人一人の女の生活をつうじ、歴史全体をつらぬくひろがりをふくみこむ意味がこめてあって、たんに女性が他の女性との生殖器的経験をもち、もしくは意識的にそういう欲望をいだくという事実だけをさしているのではない。それをひろげて、女同士のもっと多くのかたちの一次的な強い結びつきを包みこんで、ゆたかな内面生活の共有、男の専制に対抗する絆、実践的で政治的な支持の与えあいを包摂してみよう。[…]そうすれば、おおかたが臨床医学的で限定されたレズビアニズムの定義のおかげで、把握できないところに置かれてきた女の歴史と心理の息づかいに、私たちは触れはじめるようになる。(リッチ、1989：87-88)

リッチは性的関係の有無によらず、女性同士の絆を連続体として捉えることを提案している。この「レズビアン連続体」の概念はレズビアンを過度に脱性化するものとして批判もされたが、強い性化によって女性同士の愛を見落とす危険性を鑑みるのならば、リッチ

の緩やかなレズビアン定義はその柔軟性、領域の広さにおいて、非常に有効な視座となろう。あからさまなレズビアンではない女性に潜在する、無自覚な、あるいは隠蔽された女性への愛を見出し、それを女性同性愛の俎上に乗せることがリッチの概念によって可能になるのだ。菅が述べるように、女性同士の親密性の検討においてリッチの観点は欠かせないものであろう(菅、2006：25)。

3. 方法論の提案

では、日本近現代文学における女性同性愛の表象の変遷を辿るためには、具体的にどのような検討をしていけば良いのであろうか。

まず、第一に行うべきは個別作品単位での物語内容と作中における女性同性愛表象の精読を積み重ねていくことであろう。女性同性愛の表象パターンとしては、①物語の主題あるいは一部としてあからさまに女性同士の恋愛／性愛関係やレズビアン・セクシュアリティが描かれる場合、②物語の主題あるいは一部として女性同士の絆が描かれるがレズビアン・セクシュアリティがあからさまではない場合、という 2 つに大別することが出来るであろう。それぞれに例を挙げるとすれば、①は女性同士の性愛を含む恋愛関係を描いた松浦理英子『ナチュラル・ウーマン』(1987)[3]、異性間恋愛が主題であるが、女性主人公に片思いする女性が登場する山田詠美「ベッドタイムアイズ」(1985)、②は女性同士の絆や愛が友情や憧憬の文脈で描かれる吉屋信子『花物語』、異性愛が中心でありながら、娘によって「同性愛みたい」と評される義理の母娘の絆も描かれた太宰治「冬の花火」(1946)、といったところになろう。

いずれにせよ、作品全体の丹念な読解を基盤とした上で、作品における女性同性愛の位相を炙り出す必要があると言える。レズビアン・セクシュアリティがあからさまではない②の場合には、作中人物の女性たちにホモセクシュアリティを読み込む必要がある。例えば『花物語』は「血縁を除いた異性の存在を完全に排除し」(菅、2006：37)、「多くは少女たちの一過性の友愛を回顧的に語る作品であり、一時的な関係を追憶するという時間的隔絶によって、現実的な同性愛からの距離が保たれた」(久米、2004：124)。同作における女性同士の親密性は一過性のものとして描かれることで、彼女らが言外に異性愛主義を侵さないセクシュアリティの持ち主であること、転じて異性愛者である可能性が物語の外部に残されているのだ。女性への愛と異性への志向(可能性)が同時に示されているような作品の分析においては、彼女らのレズビアン・セクシュアリティを前景化させること自体が 1 つの読解となり、いわばクローゼットからアウトさせる、イン・アウトモデルの手法に通ずるものであろう。②の場合には作中の女性たちがいかに女性への愛を感ずるレズビアン性を有しているのか、作品読解を通して明らかにすることは、文学における女性同性愛表象の系譜をより多面的なものとし、また完全に非異性愛であると強く示されるもの以外の欲望やセクシュアリティを異性愛指向へと飲みこんでしまう異性愛主義を切り崩すことに繋がるであろう。

また、いずれの場合においても、作品に描かれた女性同性愛表象から、レズビアン・セクシュアリティが女性から女性に対するどのような感情として、また結び付きとして描かれてきたのか、作中内の表象自体を整理し、複数のものを共時的／通時的双方の視座で以て検討することが表象の体系化には必要だと思われる。さらにその際、女性同士の親密性が具体的に何と接続され、何を用いて語られているのか、該当人物の職業や社会的地位、趣味、デートや性行為の仕方、親密性の媒介や象徴となっているものといった細かな観点での分析も試みたい。例えば、松浦の「ナチュラル・ウーマン」では、性愛において指の挿入箇所として異性愛的性行為を喚起する膣は作中人物によって徹底的に避けられ、代わりにアナルが好まれている。また、大まかな傾向として女性同性愛を扱う作品では絵を描く女が頻繁に登場することが挙げられる。

第二に、明治末から現代までを概観する中で、女性同性愛をめぐる同時代言説を適宜参照し、女性同性愛表象の当時の社会的位相も明らかにした上で、作品発表当時の言説と作品の表象とがどのような関係にあるのか検討すべきであろう。近代日本における女性同性愛をめぐる言説研究は蓄積が厚く、参考となる既存研究が多い。肥留間(2003)は1910年代のマスメディアにおける女学生に関する同性愛言説を取り上げ、女学生間の親密性が問題視された社会背景を分析している。また、赤枝は明治末から戦前までの女性同性愛の言語表象を総体的に辿り(赤枝、2011)、1940年代後半から1960年代も取り上げ、「レズビアン」というカテゴリー定着の過程を明らかとした（赤枝、2014)。1970～1980年代の一般向け雑誌におけるレズビアン表象は杉浦郁子(2006)によって分析されている。さらに、杉浦は、肥留間や赤枝、自身の研究やその他の研究を取り上げ、近代日本における女性同性愛言説の既存研究を「性欲」の視点から整理、体系化し、残された課題を提示しつつ、同時に現在、1910年代から1990年代半ばまで女性同性愛言説の大まかな変容が辿れるとしている(杉浦、2015)。女性同性愛言説に関する既存研究を参照しながら、研究対象とする作品の発表時期に合わせて言説を収集・分析することで、作中の女性同性愛表象が、発表当時の社会における女性同性愛に対する見解を内面化しているのか、裏切っているのか、あるいはそのように単純には割り切れない関係にあるのか、といった観点から表象分析が可能となるであろう。この作業はある作品の女性同性愛表象を共時的な視座で分析すると同時に、同手法によって分析したものを時代順に並べ、通時的な視野で表象に対する社会の影響の変遷を辿ることを可能としてくれる。日本近現代文学における女性同性愛表象を総体的、複合的に研究するために必要不可欠な課題であると言える。

ここから発展的な課題として目指してみたいのが、文学において女性同性愛が描かれてきた／いること、あるいはその表象と、レズビアンに纏わる問題系を接続させることである。レズビアンが何故描かれてきたのか、ではなく、どのように描かれてきたのか、と問い、その戦略性や効果を明らかにし、また語られてきたという事実それ自体に解釈を施し

てみるということである。日本近現代文学の領域においてそれを試みる時、女性同性愛の表象をまず 2 つの系統に分ける必要がある。1 つは主には女性作家が描いたレズビアン・セクシュアリティ肯定的なもの、もう 1 つは先ほども触れたように主には男性作家が描いたレズビアンをポルノ化するもの、である。以下、現時点での仮説となるが、例を挙げてみよう。

例えば、主に女性作家による女性同性愛肯定的な作品に対しては、レズビアン・セクシュアリティがどのような戦略を用いて描かれ、またその表象がレズビアンという問題系にどのような効果を持っていたのか、という問いを立てることができるであろう。例えば、田村俊子の「悪寒」、「春の晩」は女性から女性への強い欲望が、切実に、あるいは官能的に描かれるが、作中の表象と同時代における女性同性愛に関する言説とを照らし合わせてみると、異性愛モデルや過度の脱性化／性化によって女性間の恋愛／性愛を解釈していた当時の言説に対して、「悪寒」や「春の晩」の女性同性愛表象は社会のホモフォビックな眼差しを脱臼させるものであることが明らかとなる。

松浦理英子「ナチュラル・ウーマン」におけるレズビアンの表象もまた社会の眼差しに応えない。本作は松浦自身が「絶対に共同体の期待や好奇心に応えるかたちではレズビアンを描かない」と心に決めていたことを語っており、その具体例としてレズビアンであることに悩む描写を書かなかったことを挙げている(松浦、2014：247)。松浦は他の作品においても女性同性愛を描いているが、「ナチュラル・ウーマン」と同様に「レズビアンを書く時に私は「レズビアンとは何か」「レズビアンとはどんなものなのか」という共同体の問いかけに回答するようなものは書きません」と述べており(松浦、2014：247-248)、確かに『ナチュラル・ウーマン』を始め、「葬儀の日」(1978)や「セバスチャン」(1981)、「親指Ｐの修業時代」(1991～1993)、「奇貨」(2012)などにおける松浦の女性同性愛表象もまた、レズビアンに対する社会のステレオタイプ的な無理解を裏切るものであると言える。松浦作品は作家自身がその意識を明確に語っているが、俊子にせよ松浦にせよ、彼女らによる女性同性愛の表象は社会におけるレズビアンイメージをむしろ逆手にとるという戦略で以て、それを攪乱し、固定的で偏ったレズビアン像を結ばせないという効果を有していると言える。

反対に、吉屋信子の『花物語』などは先ほども菅の指摘に見たように、むしろレズビアン・セクシュアリティを描くため、家父長制度に抵触しない「ロマンティックな友情」という仮面を被せ、水面下で保持する方策をとったものである。久米依子もまた吉屋作品を概観し、「制度順応的」的な女性登場人物たちが実は「「変則」な同性愛的絆で結ばれている」と指摘しつつ、それを「体制の補強に働いた面ばかりではなく、近代のシステムを揺らがす可能性として捉え返していく」必要性を提示している(久米、2004：128-129)。吉屋作品におけるレズビアン・セクシュアリティ表象には、制度に順応的であるという戦略が用いられているが、そのことによる近代のジェンダー／セクシュアリティ規範に対する転覆的効果もまた潜んでいる、と久米の指摘から言えるであろう。

以上、作家単位で、彼女らによる女性同性愛表象の戦略や効果を例として挙げてみたが、同様の観点は同一の作家のみに焦点化せずとも、同時代の異なる作家による複数の作品を用いて共時的に、あるいは時代と作家を違えいくつかの作品を選択し通時的に検討してみることもまた可能であろう。試みてみるべきは、レズビアン・セクシュアリティの表象を発表当時の社会的文脈に据え、既存の何物と接続され、あるいは断絶されて、いかなる戦略で以て描かれているのか、という分析である。そこを考察することによっておのずから表象の規範に対する効果と可能性を見出すことができるであろう。

一方、主には男性作家による女性同性愛をポルノ化する作品に対しては、男性によってレズビアン・セクシュアリティがどのように認識され、イメージされているのか、と問うことができよう。恐らくその総体的検討はレズビアン・セクシュアリティに対する支配と消費の歴史を辿ることになると思われ、批判的視座は議論の必要不可欠な前提であるが、批判的な検討を生産的な読みへと繋げることこそが肝要だと思われる。

杉浦は抵抗のため「レズビアンを不可視にする社会の仕掛けやプロセスを解明すること」(杉浦、2010：84)の必要性を示唆するが、ホモフォビックな女性同性愛表象を辿ることでレズビアンに対するネガティブな問題系を浮上させることはできないか、というのがここでの提案である。女性同性愛をポルノ化する作品への批判的考察を通じて、ホモフォビックな「仕掛け」を、文学の場から明らかにし、抵抗の糸口を掴む契機へと転化できないであろうか。これはレズビアンの〈認識〉という観点からの分析となり、個別作品単位でも可能ではあるが、作家を違え、複数の作品を共時的ないしは通時的に検討する方がより効果的であると思われる。

4. 方法論の実践――田村俊子「悪寒」を読む

第 3 章で提案した方法論を用いて、具体的に田村俊子「悪寒」における女性同性愛表象を分析してみよう。本作は 1912 年 10 月、『文章世界』に掲載されたものである。俊子自身と長沼智恵子の実際の同性愛関係がモデルであるとされている(黒澤、1985：96)。本作は、異性との新たな恋を見つけ去りゆく「あなた」に向けて、「私」が様々な思い出を交えながら愛惜を語る二人称の物語であり、「あなた」と「私」の親密性が物語の中心ではあるが、「私」とその夫との不和が背後には横たわっている。

先行研究では俊子自身と作品を連関させて検討したものが多く、作品を通して俊子と智恵子の関係性を分析したもの(黒澤、1985)、「私」の苦しみの原因を「あなた」の喪失よりも夫婦関係の不仲そのものに見出しつつ、作品と俊子自身の在りようを関連させて読むもの(長江、1990)、同様に作品から俊子自身のジェンダー意識を読み取り、当時におけるジェンダー規範に対し攪乱的であったと評価するもの(呉、2001)がある。俊子自身には触れず物語内容自体に関心を寄せたものでは、「私」にとっての「あなた」との関係のエンパワメント性に着目したもの（金、2004)が挙げられる。第 1 章で触れた吉川の研究も本作に言及しているが、黒澤と長江の見解を踏襲したものとなっている(吉川、1998)。

第 3 章において、レズビアン・セクシュアリティが描かれるパターンを 2 つほど挙げたが、本作はやや毛色の変わった作品であると言える。作中では、「あなた」と「私」の交流の様子は友人同士のように描かれるが、2 人が最後に会った夜において「あなた」に新しい恋の気配を察した「私」は「憎い」と思うも、それから「二月」経った語りの現在では「懐かしい」と感ぜられ、「あなた」に対する強い愛着の念が語られる。ここまでであれば、明確には 2 人の間に恋愛／性愛が展開されていないため、②物語の主題あるいは一部として女性同士の絆が描かれるがレズビアン・セクシュアリティがあからさまではない場合に該当するであろう。だが、本作において興味深いのは、以下の描写である。

> けれどもあなたはとうとう[4]私から離れてしまつた。普通の女の友達と云ふ終局を私に押し付けて、さうしてあなたは私を離れてしまつた。あの晩あなたが憎かつたのも其れでした。（田村、1912=1987：272）[5]

「普通の女の友達と云ふ終局」を「押し付け」られた、と感じるのは、すなわち「私」にとって「あなた」は「普通の女の友達」ではない、ということである。その愛着の強さ、また「二人限りの生活」の夢なども併せれば、「私」が「あなた」に望んでいた関係が「普通の女の友達」以上のもの、つまり同性愛関係であったことが明確に読み取れる。しかし、あからさまに女性間の恋愛／性愛が成立しているパターンではなく、婉曲的な表現の裏を読むことで「私」の同性愛的欲望を確定できるのであり、分類としてはやはり②に近いが、先に示した 2 つはあくまで指標であって、「悪寒」のような少し変わった例もあることを確認しておくべきであろう。むしろ、「悪寒」のような例は、婉曲的な表現における同性愛的欲望の潜在可能性に注目することを促すものであると言える。

また、「あなた」と「私」の親密性は互いに対し「一種の慰謝と鼓舞」（黒澤、1985：97）を与えるものである。

> […]あなたと一所にゐられる間の私は、臆面のない無邪気な限りのない明るさの中に浸つてゐられる子供になつてゐる事が出来ました。さもなければ恐ろしく権威を感じた一人の芸術家と云ふような他に対して思ひ上がつた気分を持つてゐる事が出来ました。私はすべてに向かつて自分の女と云ふ事を忘れてゐる事が出来ました。自分の現在の生活からちよいと立越えてゐられる様な感じが味はへたのも其の頃でした。（田村、1912=1987：271-272）

殊に「私」にとり「あなた」との絆は、自身を「子供」、あるいは「恐ろしく権威を感じた一人の芸術家」としてのセルフイメージを獲得させ、「女」というジェンダー的拘束から解放してくれるものとして機能している。「優しいしほらしい紫苑の花のやうな」「理屈などを云ふ事の知らない柔順な可愛らしい女」を夫の「傍に置いてやり度い」と思う「私」

は、自身が〈女性らしい女性〉ではないことに葛藤するものであるが、「私」は「かう云ふ悩み」を以前から抱えていたと語られる。「あなた」との絆は同性同士であるゆえに、対男性において強く意識せざるを得なかった「女」という位相から「私」を解き放ち、ジェンダー化それ自体から離れた位相をもたらすものであったのである。

「あなた」と「私」の女性同士の絆は「私」に自尊心を取り戻させるものであり、「悪寒」において提示されているものは、女性同士の絆が女性自身のアイデンティティにいかに影響を及ぼすのかという、その機能性と効果である[6]。本作における女性同性愛の表象は女性同士の親密性がセクシュアルなものを内包せずに、ジェンダー化から離れた位相に立てる、エンパワメント的な絆として描かれていることに特徴がある。ジェンダー規範的な「女」の拘束から逃れる時、親密性の相手として女性を選ぶという「私」の動静は女性同性愛が生起する 1 つの在りようを提示するものだと言える。

同時代言説との関係も検討しておこう。1911 年に起きた元女学生同士の心中事件に触発された佐藤紅緑「同性の愛に就て」(『新潮』、1911.9)という記事では女性同性愛が起こる理由が推察され、女性間の恋愛関係が異性愛モデルで捉えられている。

> […]それから最う一つは、同じ女でも男のやうな女と、女のやうな女とある。私の考へでは斯う云ふオメの関係の成立するのは、一方は強い女で、一方は弱い女ではなからうかと思ふ。同じ学校でも、同級生の者よりは上級生と下級生との間に斯う云ふ関係を作るものが多いさうだ。さうすると弱い者は強い者を愛し強い者は弱い者を愛して居るのだ。男と女の関係と同じである。私は芸者の中に斯う云ふものゝあつたことを知つて居る。其の二人は世帯を持つて居た。強い方の一人は全然亭主のやうな男の態度で弱い方は全く女房と同じ態度であつた。(佐藤、1911：22)

佐藤による同性愛解釈は、女性間の恋愛を力関係が不均衡である男女関係になぞらえたものである。同時期に発表された桑谷定逸「戦慄す可き女性間の転倒性欲」(『新公論』、1911.9)においても女性同性愛者は「能動的な者と受動的な者」がおり、「能動的な者」は「男性的」であるとされ、男性に興味がなく、「自分の身体に適するやうに思ふ」ために男装を好み、男性の仕事とされている職を望むと説明されている(桑谷、1911：38)。また、「悪寒」発表の翌年 1913 年に翻訳刊行されたクラフト＝エビング『変態性欲心理』においても女性同性愛は異性愛モデルで捉えられており、女性同性愛及び男性同性愛についてそれぞれ「後天性」／「先天性」があるとされるが、いずれにせよ同性愛的指向の深化と異性化が比例するものと見做されている(クラフト＝エビング、1913)。すなわち、当時において同性愛関係における女性の一方は「能動的」かつ「男性的」と見做され、女性同性愛関係は力関係が不均衡である異性愛モデルによって捉えられていたのである。

作品発表当時のこうした言説状況に対して、「悪寒」の女性同性愛表象はそれに反目するものと言える。作中描写から「あなた」の感情は判然としないが、少なくとも「私」が「あ

なた」を愛していた絆において、2 人が好み、その親密性の媒介、象徴となっていた「千代紙」や「絵日傘」などはフェミニンなイメージを喚起する。彼女らの結びつきはいわば女性向けの物を好み、それに媒介される点から非常にフェミニンな絆だと見做すこともできよう。

しかし、「私」は「あなた」との関係において、「女」ということを忘れ、「芸術家」や「子供」というジェンダー化から離れた位相を享受していた。さらに、「私」は、男性との新たな恋によって「物にたゆたげな女」(傍点原文)となった「あなた」の姿を「今日のあなたの自然さ」と評すのであるが、2 人の絆が生きていた頃の「あなた」はそうではなかった、すなわち「私」と同様に「女」という位相から離れた存在であったのである。また、「あなた」に対し、「小鳥の手触りのやうに柔らかく、可愛ゆく懐か」しいという愛おしさを抱き、「あなたの手を曳いた時その純な血の脈打つのを」感じたという「私」に能動性、当時の言説から言えば「男性的」なものを見出すこともできるが、共に玩具を買い集め、また「唯子供のやうになつて」遊んだ 2 人の間に不均衡な力関係は存在しない。

つまり、「私」が「あなた」に対して同棲を、そして現在で言えば恒久的なパートナーシップを求めるほどに愛していた、すなわち本作では非常に深化した女性同性愛が描かれながらも、一方の「男性化」による異性愛モデルの絆ではなく、フェミニンな絆、あるいは非ジェンダー的な絆として表象されているのである。同性を愛する女性の「男性化」はまた同性＝男性へ無関心とされるが、「私」の夫への葛藤はむしろ自身が〈女性らしい女性〉ではないことの後ろめたさであり、「男性化」の証左なのではなく、ジェンダー規範による抑圧の問題なのである。だからこそ、本作では「男性化」しないどころか、ジェンダー化そのものから女性間の絆は距離をとっているのだ。すなわち、女性の同性愛は一方が「男性的」であるはずだという同時代の眼差しを本作は軽やかに裏切り、女性同士の絆が、自己称揚的なフェミニンなものを享受しながら、自身を抑圧するジェンダー規範に反目し、もはやジェンダー化それ自体を等閑視するのだという経路が描かれているのである。一方の「男性化」という異性愛モデルを展開する同時代の同性愛解釈に対して、本作に描かれた女性同性愛は女性同士の絆がフェミニンなものを好みつつも、双方がジェンダー化そのものから離れた位相に在り、男女の不均衡な関係の模倣でなく成立しうることを描き出しているのだ。

おわりに

日本近現代文学における女性同性愛表象の研究は、様々な手がかりがあるとはいえ、まず該当作品を地道に発掘し、物語自体と作中の女性同性愛表象の精読を重ねるところから始めねばならない。そして、精読においても、変遷や系譜を辿るための議論の構築においても、同時代の女性同性愛をめぐる社会状況や言説に目配りし、また様々な理論を適宜参照して精読や議論を膨らまし、かつ精密にする必要があろう。

女性同士の愛は、男の性的な、また異性愛者の感動的な消費物ではない、女を愛する女

の〈生〉そのものである。1 人の女における、女を愛し、女と生きることの切実さ、苦しみ、喜びは決して二次元的なフィクションではなく、様々な人々が様々な出来事を体験しながら現実をそうして生きているように、女を愛する女もまた 1 つの、確かな現実なのである。女性同性愛の文学表象を研究する時、対象は確かに一種のフィクションである。しかし、それが女を愛する女という在りようを生きてきた、生きている、またこれから生きる人たちの紛うことなき人生であり、現実であることを忘れてはならない。

日本近現代文学における女性同性愛の表象の研究は無論、この領域において未だ空白の多い場を埋める作業であるが、同研究はそこに留まることなく、現代における女を愛する女に纏わる問題系を意識し、また接続を目指すべきであろう。つまりは冒頭で触れた、レズビアンの可視性の問題である。堀江有里はカミングアウトという行為の抵抗可能性について論じつつ、「「レズビアン」という名づけの意味内容それ自体を問いなおし、つくりかえていくこと」のために、「ひとつの解釈に回収されえない多様で複数の〈生〉を提示する」ような「声を発し続ける」(堀江、2015：156)ことを提案する。文学における女同士の愛の表象を提示しつづけること、またそれを研究し、系譜を練り上げていくことは、カミングアウトとはまた異なる行為ではあるが、文学世界からの「声」の 1 つとなるのではないか。いくつもの「声」が発せられる時、女を愛する女のイメージは攪乱され、「レズビアン」という輪郭の内側や境界それ自体も変容してくはずだ。

最終的に目指す地平は、クィア・スタディーズが、同性愛／異性愛の二元制そのものを抑圧の根源として解体を試みているように、また自身がレズビアンであり、タレント・文筆家として活動する牧村朝子が将来の夢を「幸せそうな女の子のカップルに〝レズビアン〟って何？って言われること」(牧村、2013：著者紹介)と語っているように、「レズビアン」という領域が充溢し、あらゆるものに敷衍し、もはや「レズビアン」という境界画定が意味をなさないというところであろう。しかし、「レズビアン」が未だ正当に可視化されていない社会において、「レズビアン」というアイデンティティを発信し続けることは、同性愛／異性愛の境界溶融という地平に向けて、歩まねばならぬ 1 つの道なのである。

注

1　レズビアン・セクシュアリティという言葉は久米(2004)より借用した。
2　吉川(1998)、呉佩珍(2001)、菅(2006)、赤枝(2011)など。
3　『ナチュラル・ウーマン』は村田容子を主人公とし、女性との恋愛を描いた「いちばん長い午後」、「微熱休暇」「ナチュラル・ウーマン」の 3 篇から成る連作集であり、1987 年にトレヴィルより刊行された。本論中、二重鉤括弧のものは連作集『ナチュラル・ウーマン』を、一重鉤括弧は「ナチュラル・ウーマン」1 篇のみを指す。
4　本文では最初の「とう」の後に 2 文字分の踊り字が書かれた表記となっている。
5　以下、テクストの引用は全て、田村俊子著、長谷川啓・黒沢亜里子編『田村俊子作品集』第 1 巻(1987)に依る。引用に際し、旧漢字は当用漢字に改め、旧かな遣いは原文ママとした。

[6] 金による、「あなた」と「私」の親密性の表象が「女性同士の関係からの疎外が、いかに女性の精神に喪失感をもたらすのか、また女性同士の絆がいかに女性自身の積極的な自己定義を力づけるかを提示するもの」(金、2004：101)であるという見解から示唆を受けたものである。しかし、金は「私」にとり、「あなた」の喪失は「あるべき女性像におさまらない、「自由に自分志向」をする自分自身を再び失うこと」(同：96)として読んでおり、換言すれば、金の読みにおいては「あなた」との絆は「私」にそのような自分を取り戻させてくれるものとして定位されているのである。「私」に対する女性同士の絆の効果をジェンダー化それ自体からの解放に見る本稿の読みは、金の読みとは二人の絆の具体的な効果については意見を違えるものである。

[参考文献]

赤枝香奈子、2011、『近代日本における女同士の親密な関係』、角川学芸出版
赤枝香奈子、2014、「戦後日本における「レズビアン」カテゴリーの定着」、小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』、京都大学学術出版会
ヴァージニア・ウルフほか著、利根川真紀編訳、2015、『レズビアン短編小説集　女たちの時間』、平凡社
菅聡子、2006、「女性同士の絆――近代日本の女性同性愛――」、『国文』第 106 号、お茶の水女子大学国語国文学会
大橋洋一、2003、「クィア理論／ホモソーシャリティ／ホモセクシュアル・パニック／クローゼット／レズビアン・ゲイ研究」、竹村和子編『ポスト・フェミニズム』、作品社
金子明雄、2004、「近代小説における性的関係の表象　谷崎潤一郎のテクストを素材として」、藤森かよこ編『クィア批評』、世織書房
河口和也、2003、『クイア・スタディーズ』、岩波書店
金ビントウ、2004、「田村俊子『悪寒』論――「私」と「あなた」の関係を中心に――」(『国文』第 100 号、お茶の水女子大学国語国文学会
久米依子、2004、「吉屋信子――〈制度〉の中のレズビアン・セクシュアリティ」、国文学解釈と鑑賞別冊『女性作家《現在》』、至文堂
リヒャルト・フォン・クラフト＝エビング著、黒沢良臣訳、1913、『変態性欲心理』、大日本文明協会(斉藤光編『近代日本のセクシュアリティ 2　〈性〉をめぐる言説の変遷』、ゆまに書房、2006 年所収)
黒岩裕市、2008、「規範化される性愛観念とその変容――日本近代文学における男性同性愛表象」(博士論文)、一橋大学
黒岩裕市、2016、『ゲイの可視化を読む』、晃洋書房
黒澤亜里子、1985、「第二章　愛の座――自我における〈視線の問題〉」、『女の首――逆光の智恵子抄』、ドメス出版
呉佩珍、2001、「一九一〇年代の日本におけるレズビアニズム――「青鞜」同人を中心に――」、『稿本近代文学』第 26 号、筑波大学
清水晶子、2013、「奇妙な身体／奇妙な読み　クィア・スタディーズの現在」、『現代思想』第 411 巻第 1 号、青土社
杉浦郁子、2006、「1970，80 年代の一般雑誌における「レズビアン」表象――レズビアンフェミニスト言説の登場まで――」、矢島正見編『戦後日本女装・同性愛研究』、中央大学出版部
杉浦郁子、2010、「レズビアンの欲望／主体／排除を不可視にする社会について――日本におけるレズビアン差別の特徴と現状」、好井裕明編『セクシュアリティの多様性と排除』、明石書店
杉浦郁子、2015、「「女性同性愛」言説をめぐる歴史的研究の展開と課題」、『和光大学現代

人間学部紀要』第 8 号、和光大学現代人間学部
竹村和子、2002、「ヘテロセクシズムの系譜」、『愛について――アイデンティティと欲望の政治学』、岩波書店
田村俊子著、長谷川啓・黒沢亜里子編、1987、『田村俊子作品集』第 1 巻、オリジン出版センター
Ａ．Ｃ．ドイル・Ｈ．メルヴィルほか著、大橋洋一監訳、利根川真紀・磯部哲也・山田久美子訳、2016、『クィア短編小説集　名づけえぬ欲望の物語』、平凡社
長江曜子、1990、「田村俊子『悪寒』について――その恐怖の本質――」、『文学研究』第 5 号、聖徳学園短期大学国語国文学会
羽太鋭治・澤田順次郎、1915、『変態性欲論』、春陽堂(斉藤光編『性と生殖の人権問題資料集成』第 29 巻、不二出版、2000 年所収)
肥留間由紀子、2003、「近代日本における女性同性愛の「発見」」、『解放社会学研究』第 17 号、日本解放社会学会
古川誠、1993、「恋愛と性欲の第三帝国――通俗的性欲学の時代」、『現代思想』第 21 巻第 7 号、青土社
古川誠、1995、「同性『愛』考」、『イマーゴ』第 6 巻第 11 号、青土社
古川誠・赤枝香奈子編、2006、『同性愛関連文献集成』第 3 巻、不二出版
堀江有里、2015、『レズビアン・アイデンティティーズ』、洛北出版
牧村朝子、2013、『百合のリアル』、星海社
松浦理英子、2014、「講演　文学とマイノリティ」、『すばる』第 36 巻第 11 号、集英社
松下千雅子、2009、『クィア物語論　近代アメリカ小説のクローゼット分析』、人文書院、
三浦玲一、2006、「クィア批評」、大橋洋一編『現代批評理論のすべて』、新書館
三橋順子、2016、「日本におけるレズビアンの隠蔽とその影響」、小林富久子・村田晶子・弓削尚子編『ジェンダー研究／教育の深化のために――早稲田からの発信』、彩流社・
MEDD,Jodie,2015, 〝Introduction〟,The Cambridge companion to lesbian literature,(edited Jodie Medd),Cambridge University Press
吉川豊子、1998、「近代日本の「レズビアニズム――一九一〇年代に描かれたレズビアンたち――」、近藤和子編『性幻想を語る』、三一書房
アドリエンヌ・リッチ著、大島かおり訳、1989、「強制的異性愛とレズビアン存在」、アドリエンヌ・リッチ著、大島かおり訳『血、パン、詩。』、晶文社